

古今和歌集

佐伯梅友校注

古今和歌集序

紀貫之ら4人に勅撰和歌集作成の命が下ったのは905(延喜5)年のことであった。『万葉集』以後、公けの席での漢詩文隆盛の中で、はじめて「やまとうた」を選ぶ貫之たちの喜びは

大きかったに違いない。10年の歳月をかけ古今の和歌を精選して成った。作風は万葉風にくらべ理知的・内省的で技巧に富み、後世に絶大な影響を与えた。



黄 12.1
岩波文庫

古今和歌集

1981年1月16日 第1刷発行 ©
1988年4月5日 第11刷発行

定価 450 円

校注者 佐^さ伯^{へき}梅^{うめ}友^{とも}

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行所 巖 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三秀舎 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-300121-4

岩波文庫

30-012-1

古今和歌集

佐伯梅友校注



岩波書店

凡 例

一 本書は、『古今和歌集』の歌に親しもうとする人のために、手軽で読みやすいものを提供しようとしたものである。

一 本書の本文は、二条家相伝本をできるだけもとの姿を残すようにして活字化した日本古典文学大系の『古今和歌集』（以下大系本という）により、あるいは仮名を漢字に改め、特殊な漢字を通行の漢字にしたり仮名にしたり、また、かなづかいを歴史的かなづかいに改めたりなど、読みやすくすることにつとめた。

一 歌番号は、『国歌大観』に従ったが、18 19 だけは順序が違うことも、大系本のままである。

一 短歌の組み方で切れ目をつけたのは校注者のわざである。だいたい大系本のままであるが、時に改めたものもある。校注者の現在の解釈を示すものとして見ていただきたい。

一 脚注は、簡明を期し、短歌ではできるだけ本文の引用を避けて、①②などで示した。③は短歌の初句（第一句）、④は第二句というわけである。⑤⑥などは、第三句から第五句までの意。また、仮名序・真名序では、本文の語句の肩の番号と見合わせるようにした。

一 歌の検索の便のために、初句と第四句（長歌は初句だけ）の索引をつけた。作者の伝記・索引などは大系本に譲って、これを省略した。その他の事も、こまごました事は、大系本を参照していただきたい。

目 次

凡 例	三
假名序	九
卷第一 春歌上	二三
卷第二 春歌下	三七
卷第三 夏歌	五一
卷第四 秋歌上	五九
卷第五 秋歌下	六四
卷第六 冬歌	六九
卷第七 賀歌	七五
卷第八 離別歌	一〇〇
卷第九 羈旅歌	一一〇

卷第十 物名	二六
卷第十一 恋歌一	二六
卷第十二 恋歌二	二六
卷第十三 恋歌三	二六
卷第十四 恋歌四	二六
卷第十五 恋歌五	二六
卷第十六 哀傷歌	二九
卷第十七 雜歌上	二〇二
卷第十八 雜歌下	二〇六
卷第十九 雜体	二二三
卷第二十 大歌所御歌・神遊びのうた・東歌・墨滅歌	二五
真名序	二六一
解 説	二七一
初句・四句索引	二七九

古今和歌集

〔仮名序〕

和歌は、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、事・業しげきものなれば、心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけて、言ひいだせるなり。花に鳴く鶯、水に住むかはづの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女のなかをもやはらげ、猛き武士の心をもなくさむるは、歌

一 種・葉など、植物にたとえて言う。「言の葉」は歌をさす。真名序に「夫和歌者、託其根於心地、發其華於詞林者也」とある。
二 それが歌なのだ、という気持。
三 今の河鹿（かじか）。春の鶯に対して、秋のものとしていう。
四 どれが歌をよまなかったか。歌をよまない生き物はなない意でいう。
五 天地の神を感動させ。
真名序に「動天地、感鬼神、化人倫、和夫婦、莫宜於和歌」とある。

なり。

この歌、天地あめつちの開ひらけはじまりける時より、いで来にけり。天の浮橋のしたにて、

女神めがみ(めがみ)男神おとこ(をがみ)となりたまへることを言へる歌なり。然しかあれども、世に伝はることは、久方ひさかたの天あめに

しては下照姫したてるひめに始まり、下照姫とは、あめわかみこの妻(め)なり。兄(せうと)の神のか

るべし。これらは、文字の數も定まらず、歌のやうにもあらぬこともなり。あらがねの地つちにしては、すさのの命みことよ

りぞおこりける。ちちはやぶる神世には、歌うたの文字も定まらず、す

なほにして、言ことの心わきがたかりけらし。人の世となりて、すさの

をの命よりぞ、三十文字みそもじあまり一文字ひとはよみける。すさのをの命は、天照(あまてる)大神のこの

かみなり。女(め)と住みたまはむとて、出雲の国に宮造りしたまふ時に、その処に八色やい(やい)の雲のたつを見て、よみたまへるなり。や雲立つ出雲八重垣妻ごめに八重垣作るその八重垣を。

かくてぞ、花をめ、鳥をうらやみ、霞かすみをあはれば、露をかなし

一 イザナギ・イザナミ二 神が夫婦の神となられた時の唱和のこと。↓古事記上

卷二 高天が原の話としては。↓日本書紀神代卷、天孫降臨章の第一の一書

三 地上の話としては。

四 「ちはやぶる」は枕詞。

五 五音節七音節を基本とする。↓決まらず。

六 三十一音節の短歌をよんだ。

七 「このかみ」は兄。ただし、ここにいう説は誤。

八 「八色の雲の…」は「や雲立つ」を誤解した。

九 「高き山も麓の塵土より…」と対になる。

一〇 雲がたなびく高さまで成長しているように。

一一 あとの「一つにはそへ

ぶ心・言葉おほく、様々ににける。遠き所もいでたつ足もとよ

り始まりて年月をわたり、高き山も麓の塵土よりなりて天雲たなび

くまで生ひのぼれるごとくに、この歌も、かくのごとくなるべし。

難波津の歌は帝の御初めなり。おほきまきの帝、難波津にて、皇子(みこと)ときこえける時、東宮をたがひに譲りて、位につきたまはで三年

(みとせ)になりければ、王仁といふ人のいぶかり思ひて、よみてたてまつりける歌なり。「この花」はむめの花をいふなるべし。

たはぶれよりよみて、葛城王(かづらきのおほきみ)を、陸奥(みちのおく)へつかはしたりけるに、国の司(つかさ)事おろそかなりとて、設(まう)けなどした

りけれど、すさまじかりければ、采女なりける女の、かはらけとりてよめるなり。これにぞ、おほきみの心とけにける。この二歌は、歌の父母のや

うにてぞ、手習ふ人のはじめにもしける。

そもそも、歌の様六つなり。唐の歌にも、かくぞあるべき。その

六種の一つには、そへ歌、おほさぶきの帝をそへたてまつれる歌、

歌」の例に出る。
三 弟君と東宮の地位を譲りあつて。

三 歌の文句の説明。

四 「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに」万葉集卷十六、三〇。

五 王のために宴席など用意してあつたが、王は不機嫌だつたので。

六 杯をとつて酒をすすめ

七 かなの続け書きを習うのに、まずこの二首の歌から始めた、という意。

八 漢詩。詩經の大序に、「詩有六義焉。一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌」とある。真名

序に「和歌有六義」として、右の順に並べてある。

九 「そへ歌」は六義の風に当たるのだらう。仁徳天皇を「この花」に「そへ」てよんだというわけで例にしたのであらう。

難波津なにはづに咲くやこの花、冬ごもり今は春べと、咲くやこの花

と言へるなるべし。

二つには、かぞへ歌、

咲く花に思ひつくみのあぢきなさ、身に三いたづきのいるも知

らずて

と言へるなるべし。

四これは、たゞごとと言ひて物にたとへなどもせぬものなり。この歌、
五いかに言へるにかあらん。その心えがたし。五つにはたゞごとと歌と言

へるなん、これにはかなふべき。

三つには、なずらへ歌、

君七に今朝あしたの霜のおきていなば、恋しきごと六に消えやわ

たらん

一 六義の賦に当たるのだらうか。例歌では、「かぞへ」という意味がどういふことかわからないので、反対説が注された。

二 深く心を奪われるわが身。鳥の名の「つぐみ」が入れてある。

三 病氣。鋭くないやじりの「いたづき」をかけている。

四 「かぞへ歌」というのは、反対説を注した人の解釈である。

五 「たゞごとと歌」というているものの例歌、という意味か。

六 六義の比に当たるのだらう。

七 これではあとのどの語句にかかるのかわからない。

「君が」なら第三句にかかり、私をここに置いて帰って行くなら、の意で、女の歌となる。第二句は、霜の

と言へるなるべし。これは、物にもならずへて、それがやうになんあるとやうに言ふなり。この歌、よくかなへりとも見えす。「たちちめの親のかふこのまゆご

もり、いぶせくもあるか、妹(いも)にあはずて」かやうなるや、これにはかなふべからん。

四つには、たとへ歌、

わが恋はよむとも尽きじ、荒磯海ありせうみの浜の真砂まささはよみ尽すとも

と言へるなるべし。これは、万(よろづ)の草木鳥けだものにつけて、心を見するなり。この歌は、隠れたる所なむなき。されど、はじめのそへ歌と同じやうな

れば、すこし様をかへたるなるべし。「須磨のあまの塩やく煙、風をいたみ、思はぬ方にたなびきにけり」この歌などや、かなふべからん。

五つには、たゞごと歌、

いつはりのなき世なりせば、いかばかり人の言の葉うれしか

らまし

といへるなるべし。これは、事のととのほり正しきをいふなり。この歌の心、さらにかなはず。とめ歌とやいふべからん。「山桜あくまで色を見つるかな、花

「おきて」と言いかけた序詞。

八 母親がかつてゐる蛋がまゆにこもつてゐるのを、いぶせき(気がはればれしない)ことの例として、作者の心を述べてゐる。

九 六義の興に当たるのであろう。

一〇 思いの数を数えても数えきれないだろう。

一一 あとの「須磨のあまの」の歌は表面は塩やく煙のことだけで、人間のことは隠れているのと比べてみよ。

一二 六義の雅に当たるのであろう。

一三 どんなにあなたのおつしやる言葉がうれしいことだろう。

一四 「ただごと歌」というのは、例歌を不可とする注者の解釈。

一五 「いつはりのなき世」を求めている意で、とめ歌というのか。

ちるべくも風
ふかぬ世に」

六つには、いはひ歌。

この殿はむべも富みけり、さきくさの三葉四葉に殿造りせり

と言へるなるべし。これは、世をほめて神に告ぐるなり。この歌、いはひ歌とは見えずな
んある。「春日野(かすがの)に若菜(わがな)つみつゝ万世(よろづよ)をいはふ

心は、神ぞ知るらん、これらや、すこしかなふべからん。お
ほよそ、むくさにわかれん事は、えあるまじき事になん。

今六の世の中、色につき、人の心、花になりけるより、あだなる

歌はかなき言ことのみいでくれば、色好みセの家に埋れ木むもの人知れぬ事と

なりて、まめなる所ハには、花すゝきほにいだすべき事にもあらずな

りにたり。その初めを思へば、かゝるべくなむあらぬ。いにしへの

世々の帝、春の花の朝あした、秋の月の夜よごとに、さぶらふ人々をめして、

一 六義の頌に当たるのであろう。

二 「さきくさの」は枕詞。よくわからないが、殿造りのすばらしい様子をいうのであろう。

三 「いはひ歌」というのは。

四 和歌が六種にわかれる事は。

五 ここでは、世の中が華美になり人の心が浮薄になつたから、和歌もそれにつれて浮薄なとりとめもないものになり、表立った場所には出されなくなつたようにいうが、実際は、公の席では漢詩が用いられるようになったために、和歌はただ男女の心を通わすためのものとなつたのだと、吉沢義則博士は説かれた。

六 色好みの家に埋れて、埋れ木みたいに人に知られぬものとなつて。

七 へまじめな公の席。
八 「花すゝき」は枕詞。

事に付けつゝ歌をたてまつらしめたまふ。あるは花をそふとて便たよりな

き所にまどひ、あるは月を思ふとてしるべなき闇やみにたどれる心々を

見たまひて、さかし、おろかなりと、知ろしめしけむ。然しかあるのみ

にあらず、さゞれ石にたとへ、筑波山つくばにかけて、君をねがひ、喜こび

身に過ぎ、樂しび心に余あまり、富士の煙けぶりによそへて人を恋ひ、松まつ虫むしの

音ねに友をしのび、高砂たかさご・住江すみのえの松も相生あひおひのやうにおぼえ、男山おとこやまの

昔を思ひいでて、女郎花おんななへしの一時ひとときをくねるにも、歌をいひてぞなくさ

めける。また、春の朝あしたに花のちるを見、秋の夕ぐれに木の葉はの落おつ

るをきゝ、あるは、年ごとに鏡かがみの影に見ゆる雪と波とを嘆なげき、草くさの

露つゆ、水みづの泡うぶを見て、我が身をおどろき、あるは、昨日きのふは栄えおごり

二 「そふ」がわからない。

二 ↓ 語三

三 ↓ 〇九五

三 ↓ 八六五

四 ↓ 善器・〇〇六

五 ↓ 〇〇以下

六 ↓ 九六六

七 ↓ 〇五五・〇六六

八 ↓ 八六九

九 ↓ 〇〇六

三 ↓ 〇〇〇。雪は白髪、波

三 ↓ 八七〇

三 ↓ 八七〇

三 ↓ 八六六以下